

Title	カントの理性批判と批判理性
Author(s)	山本, 博史
Citation	哲学論叢. 1982, 10, p. 75-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66794
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## カントの理性批判と批判理性

山

本

博

史

である。理性批判が「理性の自己認識」と称されるのは、かかる意味においてである。

カントの理性批判には、それが人間理性一般の批判であるという側面と、批判を遂行する主体が個別的な哲学的理

即ち、哲学的理性が、人間の「理性能力一般の批判」(AXII)を遂行するの

性であるという側面とが同時に存在する。

序

批判の目指すところは、認識を可能ならしめている諸要素の権利を限定することである。それ故、哲学的理性は、化 さて、カントは、我々のあらゆる認識が「経験と共に」(B1, Vgl.B161)始まることを事実として承認するが、理性

学者の分析的方法を範として、具体的認識活動の有するこの「共に」という性格を解体し、それを可能ならしめてい る人間理性の諸要素を「弧立(isolieren)」(A22 = B36)せしめて考察するのである。ここで、要素の弧立化とは、哲学 的理性の行なう先験的反省の論理的抽象作用そのものを意味している。が、このことだけからしても、 理性批判にお

いて哲学的理性という契機が軽視し得ぬものであることは明らかである。ところで、自己観察者である「探求し吟味

する理性」(A744 = B772)、即ち哲学的理性は、 「批判理性(die kritische Vernunft)」(A270=B326) と称されるのではない。「理性の自己認識」が成立した時に初めて、 人間理性に関する先験的反省を行なうにせよ、 そのことの故に直ちに

係において考察することによって、上述のことを確証すると共に、その問題点を明確にすることにある。 小論の意図は、 『純粋理性批判』における「物」概念と「自我」概念との多義性を、哲学的理性の反省的思惟との関

哲学的理性は、自らを批判理性として自覚するのである。

即ち「経験的直観の未限定な(unbestimmt)対象」(A20 = B34)を現象(Erscheinung) と名付ける。その対概念が所謂 位置或いは組織に対してのみ妥当する」(A45=B62)表象の意に解されている。即ち、 自体』は、 に主観的 ぬ 表象(第一性質)の意に解されている。それは、 哲学的理性は、「先験的感性論」において、心性の受容性の能力たる感性を、具体的認識活動から抽象し弧立せしめ 感性を受容性の能力として考察するとは、 カントは両者の差異を明確に規定するのである。経験的区別における『現象』は、「あれこれの感官の特殊な 主観一般の感性即ち「あらゆる人間感性一般」(A45=B62)に対して妥当する、主観的・偶然的ではあり得 ・偶然的表象(カントはこれをロックの第二性質と解する)の意に解されている。その際、 この現象と物自体との「先験的区別」を、 感性的表象の所与性は経験的事実として成立しているのである。さて、カントは経験的所与表象を、 感性における経験的表象を与えられた (gegeben) ものとして考察する 個別的主観の感性の有する主観性・偶然性への関係を有さぬとい それらの「経験的」(A45 = B62) 区別に対比させることに 個別的主観の感性における常 対概念である『物

意味における現象の概念は、 性の内部における量的区別と解し、後者を人間感性一般との関係において現象と名付けるのである。従って、先験的(マ) を(ロックの第一性質と第二性質との質的区別を) das Indiduell-Subjektiveと das Allgemein-Subjektive という主観 ぎぬからである。 般)との関係において為されていず、個々の主観の表象を単に経験的に比較し、 理性の経験的反省によって成立する区別である。この反省が経験的であるのは、それが未だ我々の認識能力 省を通じて、両者は分離されるのである。 12 おける『現象』と『物自体』とは不可分ではあるが、前者が individuell な主観性・偶然性を免れぬという経 自体(an sich)と称されるのである。言うまでもなく、無反省的・具体的認識活動においては、 これに対して、 哲学的理性の先験的反省によって成立するものである。 カントは、 即ち、 ファイヒンガーの指摘する如く、 経験的区別は、 個別的主観の感性の主観性・偶然性に関する哲学的 『現象』と『物自体』との経験的区別 その主観性・偶然性を捨象するにす 経験的意味 (感性一 験的反

gen) を規定するのである。反省の仕方を規定するこの語句 an sich は 《それ自身に即して、 いうことを意味しているのである。従って、この etwas を規定することなくしては、所謂物自体の意味は不明である。 Ding an sich という表現は、プラウスの指摘する如く、Ding als an sich betrachtetの縮約形と解されるべきである。 立することになるからである。では、かかるものとして想定される物自体とは、一体如何なるものなのだろうか。 も即することなく》という否定的意味を有するものである。 ことは必然的である。そうでなければ、「現象する或るものなくして現象がある」(BXXVII.)という不合理な命題が成 an sichは Dingを規定するのではなく、「物」に関する哲学的理性の反省作用を意味する betrachten (od. erwä-現象という語の語義からして、それ自身現象ではあり得ぬが現象において現象する当のものを想定する 換言すれば、 an sich シゼ ohne Rücksicht auf etwas 従って他の如何なるものに

ことなく考究(erwägen)された」(A28 = B44 ---- 傍点筆者) 物である。 意味における物自体とは、「理性(即ち哲学的理性 省を通じて「二重の観点から考察」(BXIX Anm.)し、 においては無反省であるが故に何ら区別されることのない、従って「同一の物」(BXVIII)を、哲学的理性は先験的反 自体を unbestimmbar = unbekannt と限定するのである。以上のことから、 とは言え bestimmbar であるのに対して、物自体は un-bestimmbarである。哲学的理性は、その反省的思惟において物 する限り、物自体は常に否定的な性格を有するのでなければならない。現象が悟性綜合に関して unbestimmt である 哲学的理性は、 つまり表象と人間感性一般との関係を捨象して考察された物である。 経験的反省を前提とする先験的反省の段階においては、それを人間感性一般と解するのである。 経験的反省の段階においてはこの etwas を個別的主観の感性の主観性・偶然性と解したのである。 ――筆者付注)によってそれ自体として、即ち我々の感性を顧慮する かの先験的区別を定立するのである。 即ち、 我々は次の如く言い得る。 さて、an sich という語句が否定的意味を有 哲学的理性の先験的反省により否定的 つまり、 哲学的反省以前 だ

らば、 る範疇は、 る如く、 自体による触発について語っているのである。しかし、だからと言って超験的触発を直ちに reell な関係と解するな 験的触発の立場を採るにせよ、 既にファイヒンガーが Trilemma という語で示した如く、我々は、超験的(transzendent)触発の立場を採るにせよ、経 さて、 先験的観念論は先験的実在論に堕するであろう。 カント解釈史上絶えず争われてきた触発の問題は、 純粋統覚は、 認識するためにではないにせよ、 その純粋性の故に思惟において また二重触発の立場を採るにせよ困難に陥る。だが、 思惟するために物自体に適用し得る。であるならば、哲学的理性もまた、 「無制限の領域」(B166 Anm.) では、 かかる観点からすれば如何に解されるべきであろうか。 触発・被触発とは何を意味するのであろうか。 を有する。それ故、 カントは、 実際多くの箇所で物 その形式た 後述す

でなければならない。 ことは、「先験的感性論」の問題領域においては、外的触発に対しても内的(自己)触発に対しても、 (Analogie) において定立するのである。「類推によって、私は私にとって絶対に未知なる物の関係概念を与え得る」と その先験反省的思惟において物自体に実在性及び実体性の範疇を適用し、それを「思惟的実在(ens rationis)」(A290 カントが言う様に、触発・被触発の関係は、哲学的理性の類比的思惟により成立する ideell な関係である。勿論この = B347) として思惟し得る。そして、この思惟的実在と現象との関係を、哲学的理性は現象間の因果関係との類比 同様に妥当するの

たにすぎぬ。その真の解決は、後述する如く、「先験的対象」に関する議論において初めて与えられるのである。 ところで、このように解することによって、 ――が解決されたのであろうか。否。「先験的感性論」においては、 触発・被触発の問題 ——それは現象の経験的実在性の根拠の問題に他 哲学的理性は触発・被触発の関係を定立し

に見出す。それは、「自発性の作用」(B130) として「断片」(A156 == B195)的なる知覚を統一しつつ、その働きに即し て自己の 表象に伴わざるを得ず、かつあらゆる意識において同一である我思うという表象すらをも生み出す」(B132)純粋統覚 (B153) する。そして、 「先験的分析論」においても、 「汎通的同一性」(B133) を自覚する純粋なる自己意識である。ところで、悟性を弧立せしめて考察し得るた - 悟性機能の根源的根拠を、「我々の全ての表象に対する相関者」(A123)であり、「あらゆる他の 哲学的理性は悟性を心性の他の要素から弧立せしめて、悟性を「それだけとして考察」

めには、我々は何らかの仕方でその根拠たる純粋統覚を定立し得るのでなければならぬ。だが、純粋統覚について何

らかのことを思惟せんとするならば、「絶えざる循環」(A346 = B404)に陥らざるを得ぬという困難に我々は直面する のである。では如何にして、それは定立されるのであろうか。

的理性は、自発的に働き自己を観察しつつ、その働きに即して、またその働きを直接的に意識しつつ、自己の現存在 私が現存在を限定する仕方は……それによっては未だ与えられていない」(B157 Anm.——傍点筆者) と。即ち、哲学 く言う。『我思う』は、私の現存在を限定する働きを表現する。従って、それによって既に現存在は与えられているが、 統覚の自我とを厳密に区別しつつも、自らの働きと存在との直接的意識において、即ち自らの「力学的実在性」(A164 経験的統覚の客観としての断片的自我(内官の対象としての現象我)と経験的統覚の主観としての断片的自我と純粋 まる。とは言え、カントが、「我思う」は「我思いつつ存在す」と「同語反復的」(A355)と、或いは「同一」(B422 Anm.) (wie) 在るかは「未限定(unbestimmt)」 (B422 f. Anm.) にとどまる。即ち、was 及び wie に関しては空虚(leer) にとど そこには自己直観が欠如しているが故に、現存在を限定する仕方、即ちこの実在的なるものが何(was)であり如何に を「或る実在的なるもの(etwas Reales)」(B423 Anm.——傍点筆者) として直接的に意識しているのである。勿論、 と言う場合、それは、哲学的理性の自発的働きとその存在との直接的合一を意味しているのである。哲学的理性は、 しつつも、それらが == B669) の直接的意識においてそれらの同一性を自覚しているのである。また同様に、理論理性と実践理性とを区別 カントは、自己に注視し、自己を観察する哲学者という意味での「知性(Intelligenz)」(B158 Anm.)に関して次の如 個別的自我の「現実性を直接的に言表する」(A355)この意識は、直接的であり「純粋に知的」(B423 Anm.) 「同一の理性」であることを自覚しているのである。

であるとは言え、「限定する働きに先立って」(B158 Anm.) 成立するものではない。「何らかの経験的表象なくしては、

(intuitiv)である」と、 353) ことによって、 である。そして、後述する如く、哲学的理性は、この individuell な意識を他の物に「すり換える (unterschieben)」(A れ自体は、individuell なことである。即ち、この現存在の知的な意識は、individuell なこの「私の現存在」の意識なのれ 哲学的理性は上述の如き知性であり、 こと、「現存在の感情」等々と。これらの表現における「知覚」や「認識」といった語は、カントの通常の語の用法に(ピ) は「客観的意識」とを区別する。そして、後者は「自己自身に還帰した意識であり、それは比量的ではなく 直 定立するのである。 識が「決して直観ではない」(B278)ことを強調する。だが、その直接性の故に、直観という語は避け難いであろう。 反するものであるが、これらの表現は上述の意味に解されねばならない。成程、 Anm.)、「思惟する主観の自己活動性の単に知的な表象」 (B278)、「単なる統覚により自己自身を認識する」 (A546=B574) 意識」(BXL Anm.)、「内的知覚」(A343 = B401)、「未限定な経験的直観即ち知覚」(B422 Anm.)、「未限定な知覚」(B423 直観でもない。カントは、このフィヒテ的な知的直観を以下の如く様々に表現している。即ち、「私の現存在の知的な が故に、物自体を直接的に認識し得るような「根源的直観」(B72)、神的直観ではない。だが、勿論それは感性的自己 即して成立する「綜合の意識」(B133)なのである。従って、それは、「多様なるものを意識の統一へと綜合する特殊な 働き」(B139)を必要とせず、直観することによって直ちに対象そのものを「与え」「創造する(hervorbringen)」(B145) 『我思う』という働きはやはり生じないであろう」(B423 Anm.) と言われる如く、それは経験的表象を限定する働きに üderindividuell な規範的意識即ち意識一般(Bewußtsein überhaupt)を言わば要請するのである。 カントは、『形而上学講義』において、「心理的意識」或いは「主観的意識」と「論理的意識」或い 同様のことを主張するのである。ところで、哲学的理性が純粋統覚を直覚的に定立することそ 知性として働きつつ純粋統覚をかかる意味における知的直観によって直覚的に カント自身は、この純粋に知的な意 覚的

う反省的抽象作用を意味するものである。従って、感性に関する哲学的理性の反省的思惟そのものが、ここでは自己 い」ということを意味する。即ち、注意及び「負の注意」という語は、カントにおいては、かかる弧立化と捨象とい⑵ るものを捨象する即ち度外視する (von etwas abstrahieren) とは、或るものに注意し、それ以外のものに「注意しな 自己触発の概念とは異なる。カントに従えば、何らかの結合せる表象において或るものを弧立せしめ、それ以外の或 発——筆者付注) の例証を与え得る」(B156 f. Anm.) と言われる場合の自己触発の概念は、「先験的感性論」における 発の概念に言及しておかねばならないであろう。 によって、 の直覚的定立の場合と同様に、individuellな意識である。それ故、カントは、「これ (即ち注意という働き— であった。従って、 考察された現象我と自我自体との ideell な関係概念が、外的触発の場合と同様の意味において自己触発と言われたの 触発と言われていると考えられる。これに対して、「先験的感性論」においては、哲学的理性によって二重の観点から 157 Anm.——傍点筆者) と言うのである。 かかる哲学的理性の直覚的定立との関連から、 心性が通常如何に屢々触発されているかということを、各人は自らの内において知覚し得るであろう」(B 両者には、決定的な意味の差異が存するのである。更に、 「注意(Aufmerksamkeit)という名々の活動は、それ 第二版の「先験的演繹論」において主張されている自己触 かかる意味での自己触発の意識も、 (即ち自己触 筆者付注) 先

## Ξ

って論理的に一般化した überindividuell な「意識一般」(B143)、「統覚一般」 (B143) を考察する。それは、überindivi-哲学的理性は、 感性一般を考察したのと同様に、 純粋統覚を直覚的に定立しそれを上述の如くすり換えることによ

般の思惟を種々の様相に応じて表現」(A247==B304)しているのである。 (A104) へと結合し概念把握するという「論理的意味」(A248 == B305) を有するのである。 体的には、即ち純粋範疇としては思惟において「無制限の領域」を有し、 288 = B344) 感性的制約を 「分離」 (A147 = B186)゙ 「捨象」 (A247 = B304) することによって純粋統覚を自体的に考察する。そうで duellである限りにおいて認識の普遍妥当性の一源泉たり得るのである。さて、この場合も、 関係し得るであろう。それ故、 純粋統覚は、現象と物自体との先験的区別に関係なく「あらゆる物に無差別に(ohne Unterschied)」(A 即ち 「物一般」 (B128) を純粋統覚の対象として措定するのである。従って、その形式たる範疇も自 哲学的理性は、 先験的区別そのものを捨象することによって論理的に一 如何なる表象であれ、それを「一つの意識」 即ち、 哲学的理性は、 純粋範疇は、 あらゆる

的像に応じて「常に可変的」(A107)であり、「それ自体ばらばらになっている」(A120, B133ー は なくして考察するならば、 154) へと綜合されねばならない。そこに知覚が成立する。だが、形像的綜合は、自体的に、 的なる現象は、生産的構想力の形像的綜合(synthesis speciosa)即ち覚知・再生の綜合によって「限定された直観」(B 表象への関係なくして考察するならば、「あらゆる表象の内で最も貧しい表象」(B408)なのである。 「我々にとって無」(A191 = B236)である。それ故、 だが、純粋統覚は、 「表象の無規則な累積」(A121)、即ち断片的な像 (ein Bild)にすぎず、 即ち一者性を有する純粋統覚への関係なくして考察するならば、それは「私にとって客観となり」(B138)得ず、 それが純粋である限り思惟内容を欠く空虚な表象である。純粋統覚は、 盲目的な綜合にすぎない。形像的綜合を自体的に考察する限り、 認識が成立するためには、両者は綜合されねばならない。 知覚の主観たる経験的統覚の自我もまた断片 そこにおける知覚の客観 即ち統覚の統一への関係 自体的に、 -傍点筆者)のである。 他方、 即ち感性的 現象を自体 未限定

後述する如く、

具体的自覚が成立する。

を経たとは言え断片的像にすぎない知覚の対象とは異なり、 の側においては、「一つの自然」(A216 = B263 ---- 傍点筆者)が成立する。それは、 より統一性を獲得せねばならない。そこに、客観の側においても主観の側においても、 それ故、 形像的綜合は、 統覚の悟性綜合 (synthesis intellectualis) との綜合、 かかる多様体の綜合的統一体である。 即ち 「構想力の先験的綜合」 (B153) 未限定な多様体たる現象や、 具体的統一が成立する。 主観の側において 限定 ΙΞ

同様、 客観的実在性を保証する先験的対象は、「感性的直観における多様なるものを統一するために、統覚の統一の相関者と るものがなければならない。筆者は、それを「先験的対象」或いは「先験的客観」と考える。 前者が、 の主観の側における形式的な先験的根拠であるのに対して、先験的対象は、 してのみ用いることができる」(A250, Vgl. A105, 109)と言われる。 て主観と客観との関係を与えるような対象を指示する(Vgl. A104f., A252)。かかる 「表象の対象」 (A104)として現象の 表象である限り、 対応する「或るもの一般 = X」(A104)である。だが、 その それ故、 一つの自然がかく成立するにしても、 限定的であるとは言えあらゆる被限定性を欠く「思想の先験的主観(主語)=X $\rfloor$ (A346=B404)であるのと相関者たる後者もまた被限定性を欠く。 現象ならざるものへの関係を指示し、自らに対応し、自らに客観的実在性を与え、そのことによっ 現象が単なる仮象に、 先験的対象は純粋統覚の相関者であると言われるが、現象がかかるものを指示することは純 従って自然が単なる虚構に転落しないためには、その経験的実在性を保証す 現象は、 それ故、 現象が現象ならざるものを指示することは、 意識の対象としては 先験的対象は、 つまり、 現象に 純粋統覚が、現象を綜合的に統一する際 客観の側における先験的根拠なのである。 「我々の表象の単なる戯れ」(A101)にす 「常に一様」(A109 Vgl. A253) に 現象は、それが単なる 感性自身の関知

ぬところである。また、

するものを先験的対象として要請し、それを純粋統覚の相関者として措定するのである。だが、 粋統覚自身にとっても関知せぬところである。感性をも悟性をも考察する哲学的理性が、 現象の経験的実在性を保証 両者が相関すること

は何を意味するのであろうか。

存在を前提し、要求することを論証することによって為される。その論証を概略すれば以下の如くである。 論駁は、 現象(外界)の存在を「疑わしく証明し得ぬ」(B274)とする後者を、 自己の現存在の経験的に限定された意識、 実質的観念論を独断的・心理学的観念論と蓋然的観念論とに区分し(Vgl. BXXXIX Anm., 即ち自己認識において成立する具体的自己意識が、外的現象の現 特に「観念論論駁」の章において論駁する。 B274)′ 外的

易し、 象外の持続的なるもの (ein Beharrliches) を時間限定の real な根拠として前提する。というのは、 我々は、 づけるものは、 的綜合が継時的(sukzessiv)な綜合であるが故に、それによって成立する知覚表象もまた継時的であり、 時間限定の基体たり得ぬからである。先験的対象は、 自己の具体的な現存在を時間において限定されたものとして意識するが、あらゆる時間限定は、 個別的な具体的な対象として表象内に存する。 表象の対象としては表象外に存するが、それが根拠 かかるものとして、先験的対象は時間限定の本来 構想力の形像 絶えず変 直観 表

内的直観表象並びに外的直観表象の先験的根拠であるとは言え、 ところで、 を経た自己意識が成立するためには、 的直観形式たる空間において表象されるのでなければならない。 内官の 「本来的素材」(B67, Vgl. BXXXIX Anm.)は外的直観表象に他ならぬ。それ故、 外的現象の現存在を「要する(erfordern)」(B278)。 それが根拠づける個別的対象は、 従って、 自己認識における具体的な、 直接的には外 先験 時間限定 的対象は、

観念論と経験的実在論との「相互浸透」を意味しているのである。(マズ 験的対象を要請(要求)する、 的観念論は上述の誤った観念論から自らを区別するのである。 自己認識が成立するためには外的現象の現存在を要するというこの論証の核心は、 しかも純粋統覚の相関者として要請する点にある。 即ち、 純粋統覚と先験的対象との相関関係は、 それを要請することによって、 現象の経験的実在性を保証する先 先験的

は、 は、 定立したにすぎなかった。だが、今や先験的対象を現象の経験的実在性の先験的根拠として要請するのである。 後者が認識し得ぬにせよ、 なければならないであろう。 ŋ 的理性が純粋統覚の相関者として要請し、 よって解決せんとする。だが、要請そのものは如何なる根拠に基づいて為されるのであろうか。 哲学的反省以前における同一性とは無論異なるものである。 対象をかく要請するとは、 哲学的理性にとっては自明のことであるにせよ、未だ主題的とはなっていないからである。哲学的理性が先験 純粋統覚に相関するものである限り、「先験的感性論」における物自体とは異なる。 それを根拠として言わば要請されたものであった。そうであるならば、 既述の如く、 哲学的理性は、「先験的感性論」において、 哲学的理性の自発性及び自己所与性の individuell な知的直接的意識にその根拠を有するものであ 両者が 現象としての物と自体的に考察された物とが二つの異なった物であるのではなく、 哲学的理性は、 「同一の物」(BXVIII)であることを要請することである。この要請された同一性は、 措定したものであった。だが、この überindividuell な純粋統覚そのものも 知性としての自らの存在の確実性を根拠として、 物自体と現象との関係を触発・被触発という ideell な関係として カントは、 現象の経験的実在性の問題を、 その相関者たる先験的対象もまたそうで そこにおいては、 先験的対象を現象 先験的対象は、 かかる要請に 統覚の問 たとえ それ (議 的

論の主題からすれば外的現象)の先験的根拠として要請するのである。しかも、

あくまでも未知なる根拠として要請

現存在を……単に信仰(Glauben ) に基づいて想定すること」を哲学の「醜聞」(BXXXIX Anm.) とし、 「媒語二義の誤謬推理(sophisma figurae dictioni)」(A499=B528)に陥るからである。 る限り、 純粋統覚の自我を無制約者として求めんとするならば魂の理念が成立する。先験的対象もまた、 するのである。 そしてそこに無制約者を求めんとするならば世界の理念が成立する。 それ自身無制約的である。それ故、 純粋統覚は、「あらゆる統一の制約ではあるが、やはりそれ自身無制約的である」(A401)と言われるが、 同様に「経験的対象から先験的対象へと上昇せんとする」(A545=B573) だが、 カントは、 両理念に関する先験的推論は 「我々の外なる物の 純粋統覚の相関者た それを上

てきた。だが、今や哲学的理性にとっては自明のことであった感性と悟性とが「共に」働くことの自覚が成立してい である。さて、 述の如く哲学的理性の自己に関する直覚知のの確実性によって基礎づけんとするのである。 覚しているのである。これまでは、 具体的自己意識として実現する (realisieren) (Vgl. A146=B185 f.)。かく実現した自己意識は、統一なき経験的統覚と である。このことこそ、「観念論論駁」の章及び「純粋理性の誤謬推理」の章において、 的現象である限り、 individuell な純粋統覚において自己の現存在が既に与えられているとは言え、自己認識は、内官の本来的素材が外 内容なき純粋統覚とも異なり、 抽象的自己意識たる純粋統覚は、思惟内容を感性的表象に制限 (restringieren) されることによって、 対象認識に即してのみ成立するものである。即ち、一つの自然の成立に即してのみ成立するもの 四 感性も悟性も自体的に考察され、 自らが感性及び悟性として働くことを、従って自らが自然の立法者たることを自 両者は互いに何ら関知せぬものとして考察され カントが主張せんとしたこと

るのである。

従って、

この具体的自覚に到達した統覚は、

哲学的理性と合一し、自己還帰せねばならない

ぬ故、 (「対象一般を現象体と叡智体とに区別する根拠について」の章)。 現象体とは、先験的統覚により 「範疇の統 matisch)」 (B310) 概念である。 は、 (iii) (D) の限界をも示す「限界概念」(A254=B310, Vgl. A256=B312)である。ところで、その限界の意識は何処に成立する 性の越権 (Anmaßung) を制限するとともに、 知的直観を人間には認めぬのであるからして、 ない物を、 叡智体は、 対象として思惟される限りの現象」(A248 f.——傍点筆者)である。他方、 的統覚は、 物としては同義であるが、それらの有する意味は何れも異なる。「先験的感性論」における物自体は、 哲学的理性は、 であろうか。 「先験的弁証法」 叡智体は、 客観的実存性を有するものではないが、 叡智体が客観的実在性以外の何らかの実在性を有するか否かは、 その否定の仕方に応じて二義的に解される。 自らの純粋統覚の対象即ち物一般を、 積極的意味においては非感性的直観の対象を意味する(Vgl. B307)。だが、 かかるものとして、 カントは、 その否定的思惟によって、 における無制約者としての物自体の三様に解する。 物自体を;「先験的感性論」 が、 叡智体は、 人間悟性が現象の領域外に蓋然的には拡張され得ることを示す 「蓋然的 (proble-悟性自身もそれを蓋然的に思惟し得るのみで認識し得ぬという悟性自身 論理的に無矛盾な可能的概念である。 現象に対して物自体を措定した。だが、今や具体的自覚に到達した先験 叡智体は消極的意味にのみ解されねばならない。かく解された叡知体 感性がかかる蓋然的概念にまでは及び得ぬことを示すことによって感 現象体 (Phaenomenon) と叡智体 (Noumenon) とに区別して思惟する 即ち、 における触発者としての物自体、 叡智体は、 我々にとっては問題的 (problematisch) であ それらは、 現象たり得ない、従って現象体たり得ない 消極的意味においては感性的直観の 勿論、 現象に対して否定的に思惟された 既述の如く、 ii 限界概念としての物自体 それは論理的可能性にすぎ カントは根源的 感性を自体的に 一に従って 対象で

を求めるべく「制約の制約」(A307=B364) へと上昇せしめるものである。

に は、 考察する哲学的理性が、その否定的思惟によって措定したものであった。 働くことの自覚に成立するものである。 感性に表象され得ぬ物自体を悟性が蓋然的にではあるにせよ思惟し得るという自覚に、従って感性と悟性とが 哲学的理性にとっては自明のことであるにせよ、感性自身にとっては未だ問題とすらなっていないのである。 限界概念を措定することを通じて、 限界の意識はそこにおいては成立すべくもない。これに対して、限界概念としての物自体(叡智体) 哲学的理性と合一するのである。 即ち、上述の具体的自覚において初めて限界の意識が成立するのである。 それ故、 悟性がそれを思惟し得るというこ

哲学的理性が要請した先験的対象を、今や自らが自らの純粋統覚の相関者として措定したものであることを自覚して 叡智体と称する」(A288=B345)ことは許される。 具体的自覚に到達した統覚は、哲学的理性と合一することにおいて、 統覚によって感性的直観の対象ではない物として措定されたにすぎぬ故、 理念との関連において、 17 味を有する先験的対象とは区別されねばならない (Vgl. A253)。 だが、先験的対象を、「その表象が感性的でないが故に、 現象界の限界とともに、 解放された対象が存在しないだろうかという課題」(A287==B344) を示すものである。 ところで、叡智体は「課題(Aufgabe)の表象に他ならぬ」と言われる。 るのである。 そして、この先験的対象をも叡智体として表象し、 この課題性の自覚こそ、 次のことが特に重要であろう。限界概念としての物自体(叡智体)は、具体的自覚に到達した 叡智体のこの問題性・課題性もまた自覚されているのである。が、「先験的弁証論」の世界の 我々の理性をして「現象の諸制約の系列の絶対的統一」(A334=B391) 自らが要請した先験的対象の根拠としての課題性をも自覚 即ち、 現象の客観的実在性の先験的根拠という意 それは、 勿論、 「感性的直観 具体的自覚においては、 配の制約 から全く

念の二義性について」という章に初めて登場する概念である。既に引用した箇所であるが、 =B324) を限定する。表象の認識能力に対する帰属性をかく限定することによって、哲学的理性は認識可能なるもの すぎないのである。哲学的理性は、その自己観察により、あらゆる表象の感性及び悟性に占める 「先験的場所」(A268 すぎない。それは、「外的観察者(äußerer Beobachter)」(A362) としてではなく、内的(自己)観察者としての理性に それ自体として考究された」物と言われる時、 意味する。哲学的理性は、最初から自らを批判理性として自覚している訳ではない。批判理性という概念は、「反省概 的理性の側から言えば、 原則を批判するものである。 と不可能なるものとを「分かつこと (Einteilung)」 (A290=B346) を、従って現象界の限界を自覚するのである。そし 体系」 (A270=B326) を、またそれを経験的区別と解するロックの「精神発生論 (Noogonie)」 (A271=B327)を批判す その限りにおいて、「先験的二義性即ち純粋な悟性の客観と現象との混同」(A270=B326) に基づく誤った綜合的 具体的自覚に到達した先験的統覚が、 哲学的理性は、 哲学的理性がかかる現象界の限界の自覚を通じて自らを「批判理性」として自覚することを かかる先験的反省の運動において現象界の限界を自覚し、それを自覚することにおいて 即ち、現象と物自体との先験的区別を論理的区別と解するライプニッツの「世界の知 その理性は未だ「観察者 (Zuschauer)」 (BXXII Anm.)としての理性に 限界概念を措定することにおいて哲学的理性と合一することは、 即ち批判理性であることを自覚するのである。 物自体が 「理性によって

## 五

自己還帰し、

自らが現象界と叡智界とを分かつ理性、

以上の如く、 カントの理性批判は、 哲学的批判理性による先験的反省の運動の記述、 理性の自己認識の記述と解さ

においても暗黙の内に主張されているのではないだろうか。カントは、空間が経験的概念ではないことを次の如く論 筆者付注) の観点から考察する」(A362, Vgl. A364)ことができるのである。即ち、思惟する存在者としてのこの私は、 証する。 かかる空虚さの故に、 は was 及び wieに関しては空虚なものであった。この内容の空虚さの故に、「私は私自身を他者 (即ち外的観察者 哲学的理性は、 (Ubertragung dieses meines Bewußtseins auf andere Dinge)」 (A347=B405----傍点筆者) によってのみである、と 惟する存在者一般」(A347==B406)を、即ち規範的な意識一般を要請するのである。カントは、「純粋理性の誤謬推理 づくことを主張する。 について」の章において、思惟する存在者としての他我の問題に言及し、次の如く、 に定立する。そして、既に少し触れておいたが、それを他の物へと「すり換える」ことによって überindividuell な「思 individuell な感性及び悟性をその考察の対象とするのである。哲学的理性は、純粋統覚に関して言えば、それを直覚的 ぎない」(A837=B865)と言われる所以である。だが、哲学的理性は、一般 (überhaupt) という語で表現される über-れる。ところで、哲学的理性の感性に関する反省的思惟そのものも、また純粋統覚の直覚的定立も individuell な性格 を有するものであった。かかる性格こそ、哲学が記述的でない限り学び得ず、「せいぜい哲学することを学び得るにす かかる哲学的理性による直覚的定立とすり換えは、 成程外界の存在を保証し得る程確実な、自らの力学的実在性の知的直接的意識を有する。だが、それ 直ちに「思惟するこの私、 即ち、 他の物が思惟する存在者として表象されるのは、「この私の意識を他の物へと転ずること 或いは彼、 或いはそれ(物)」(A346=B404)でもあり得るのである。 純粋統覚に関してばかりではなく、 他我の承認がこのすり換えに基 「先験的感性論」

 $(\alpha)$ 「或る感覚が私の外なる或るものへと(即ち、空間中の、私自身がその内に存在しているのとは別の場所にある

従って単に異なっているのではなく異なった場所にあるものとして表象し得るためには、 或るものへと) 関係づけられるためには、 また、 私が、それらの感覚を相互に外在的或いは並存的なものとして、 空間の表象が既に根底

になければならない」(A23=B38)。従って、空間は経験的概念ではない。

事実を主張するものである。哲学的理性は、この経験的事実を承認する。経験は、空間表象を「除去しては考えられ は成立し得ぬという経験的事実に基づくものである。即ち、その前段は、具体的認識活動においては現象と不可分で 間中に占める特定の場所(視点)から、感覚表象を現象に関係せしめ、感覚表象を相互に区別するという場合、差し当 ある感官の感覚表象が、感覚に対応する現象の質料に関係し得るためには空間表象を要するという事実を主張するも この論証は、 ころの時間は、 ぬという必然性」を示すからである。勿論、 (erzeugen)」 (B202) される。この「外延量」(A162=B203) としての部分空間及び形像化(空間化)された部分時間を の図式たる「数(Zahl)」(A142=B182)を媒介として綜合され、部分としての「一定の空間或いは時間の 表象 が と言われる。 験的な空間表象である。また、私自身を他者の観点から考察する場合、 って問題となっているのは、 様な空間表象及び時間表象が語られる。純粋直観としての根源的量quantumと量の範疇quantitasとは、quantitas 個別的主観の感性における如何なる経験的表象も、 が、その場合の時間表象もまた同様の時間表象であろう。これに対して、「直観の公理」の章においては、 私自身の感性において見出される時間ではなくて、彼の感性において見出される時間である」(A363) その後段は、感覚表象を相互に質的のみならず場所的に区別するためには空間表象を要するという 個々の経験的表象と個別的主観との関係によって成立するパースペクティヴを有する経 時間に関しても同様の論証が成立する。ところで、私が、 即ち経験的直観表象も感覚表象も空間表象なくして 「その観察者が私をそこへと措く(setzen )と 私の身体が空

ある限り、その一様性は純粋直観としての時間にも基づくものでなければならない。だが、純粋直観としての時間 張しているのである。だが、 また空間が一様であるとはどういうことなのであろうか。 者付注)を(同種的なる)一に継時的に付加することを含む表象」(A142=B182) である。カントは、この同 の継時的付加ということで、 産出する「集合 (Aggregation)の綜合」 (B201 Anm.) は、数を媒介とする綜合であるが、数とは「一(即ち単位) 集合の綜合が、「あらゆる綜合判断の媒語」(A155=B194)たる時間を媒介とする綜合で 自然科学において計測される外延量としての部分空間及び部分時間の一様性を端的に主 的単位 筆

るア・プリオリな必然的表象であることを、次の如く論証する。 カントは、 空間及び時間が経験的概念ではないことを論証した後 (@参照)、それらが経験的直観表象の根底に存す

証から空間及び時間が純粋直観(直観形式)であると結論する。 に引続いて、 ginarium)\_ その構想力によりそれらを捨象するにせよ、それは不定へと(in indefinitum)進まざるを得ないであろう。そうである て分離・除去しても、  $(\beta)$ 純粋な空間及び時間がかかる捨象の後にも残存し得ることは、何ら経験的事実ではない。また、哲学的理性が (ので示された経験的事実とは反対に、 両者がかかる捨象によっても残存すると言われる時、それは、哲学的理性が直覚的に「構想的実在(ens ima-(A291=B347)として定立したのであると言わざるを得ないのではないだろうか。カントは、この論証 空間及び時間は、 空虚な、純粋な空間及び時間は「考え得る」(A29=B38)。従って、 部分表象を「自己の内(in sich)」(B40)に念む故に、直観表象であると論証し、 かの経験的表象から経験的なる感覚表象及び経験的なる現象の質料を全 空間及び時間は云々。 両論

ところで、 哲学的理性は、 個別的主観の感性における経験的表象を、差し当ってはその考察の対象とした。だが、

哲学的理性は、 は如何なる人間感性に対しても一様にその制約たり得るのである。即ち、 が有していた個別的主観に対する関係の個別性(パースペクティヴ性)をも失っているのである。 経験的なるものを全て捨象したものであるが故に、個々の現象の質料が有していた個別性を失っている。 象の質料をも捨象し、 省に基づき捨象するのである。そこに、 ることにおいて、それを他の感性にも適用し、純粋直観を人間感性一般の形式とするのである。 「感性的直観一般の純粋形式」(A20=B34― 如何なる現象の質料に対しても一様にその制約たり得るのである。 かかる経験的表象において、経験的なる感覚表象を、 そこに残存するものを直覚的に定立するのである。が、かく直覚的に定立された純粋直観は、 先験的意味における現象が成立するが、 ――傍点筆者) なのである。また、それとともに、感覚表象及び現象の質料 それが主観性・偶然性を免れぬという経験的反 哲学的理性は、 即ち、 哲学的理性は、 純粋直観は、 純粋直観を直覚的に定立す 更に、 それ故、 現象一般の形式、 経験 それ故、 的なる現 純粋直観 純

観念論を先験的観念論として支えているのは、 る契機であるばかりでなく、 立とすり換えが存するのである。 以上の如く、 カントの理性批判には、 理性批判全体をその根底から支えている契機であると言えよう。 が、そうであるならば、 哲学的批判理性であると言えよう。 純粋統覚に関しても純粋直観に関しても、 哲学的批判理性は、 単に先験的反省を遂行しそれを記述す 哲学的批判理性の直覚的定 即ち、 カントの先験的

ない。 規範的な純粋統覚及び純粋直観を言わば要請する。 な綜合判断の事実性を承認するが故の要請である。 純粋直観に関して言えば、 そこには問題があるのではないか。 経験的表象を全て捨象するという仕方で、 カントは、 勿論、 それは、「真の、或いは厳密な普遍性」(B3)を有するア・プリオ かかる直覚的定立とすり換えによって、überindividuellな、 この事実性も問題ではあろうが、ここでの問題はそれでは 我々はそれを果して考え得るであろうか。

619=B647) に比すれば、「合法的」と言い得るかもしれぬ。だが、individuell な純粋統覚の überindividuell 学的批判理性による直覚的定立とすり換えは、先験的観念論をその根底から支えるものではあるにせよ、 を孕んでいるのである。 し得ないのではないだろうか。だが、それが克服し得るとしなければ、認識の普遍妥当性は成立しないのである。哲 へのすり換えが、哲学的批判理性による一方的な承認である限り、哲学的批判理性は自らの individuell な性格を克服 よ、そこにはやはり問題がある。哲学的批判理性によるすり換えは、「先験的弁証論」における「先験的すり換え」(A 立し得るというその根拠は何なのであろうか。純粋統覚に関しても同様であるが、仮にその直覚的定立を認めるにせ 抽象された」と言われる如く、純粋直観が直覚的に定立されたものであるとしても、哲学的理性がそれを直覚的に定 また、よしんば、「精神の働きそのものから……あたかも不変的な範型として、従って直観的に認識し得るものとして な純粋統覚 かかる問題

## 注

- (1)カントからの引用は、カッシーラー版(Immanuell Kants Werke, hrsg. von E. Cassirer)に依る。『純粋理性批判』からの 引用は、巻数を略し、その頁数を第一版をA、第二版をBとして本文中に記した。
- (\approx) Kant, Werke, Bd. IV. S.69, Vgl. A849=B877
- (α) Vgl. BXXI Anm., Bd. IV. S. 121, Bd. V. S. 175f., Bd. VI. S. 16 Anm., auch Vgl. H. Vaihinger, Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft, Scientia Verlag Aalen, 1970 (zuerst 1922), Bd. II. S. 120-23
- (せ) auch A62=B87, A305=B362, Vgl. B5, A21=B35, A22=B36, A27 =B43, A32=B49 usw. 犇じ、A27=B43, A32=B 49において isolieren という語が abstrahieren と言い換えられている点に注意。

- (15) auch A787=B815, Bd. IV. S.8
- (Φ) Vgl. A28f., A45=B63
- (7) H. Vaihinger, Kommentar, Bd. II. S.460-466 既述の如く、経験的意味における『現象』と『物自体』とは、具体的認識活 であるばかりではなく、なお質的区別をも保存している。 未限定なる対象たる現象は感覚表象と不可分である。が、感覚表象と直観表象とが区別される場合、それは単に量的区別 動においては不可分である。即ち、経験的直観表象が常に感覚を介するものであると言われる様に (Vgl. A20=B34)、その
- (∞) G. Praus, Kant und das Problem der Dinge an sich, Bouvier, Bonn, 2. verb. Aufl., 1977, S. 13-23
- (の) カントは、an sich を ohne Rücksicht auf ... や、それに類する表現でもって説明することによって、その否定的意味を明 確にしている。Vgl. A29=B44, A36=B52, A38=B55, A42=B59, A48=B65, B70 Anm., A190=B235, A252 usw.
- (2) H. Vaihinger, Kommentar, Bd. II. S. 53
- (A) Kant, Werke, Bd. IV. S. 112 Anm.
- (12) フィヒテも『知識学への第一序論』において、「知性(Intelligenz)は、かかるものとして自己自身を見る。そして、 己自身を見るということは、知性であるところの全てに直接的に関係する。存在することと見ることとの直接的合一に知 性の本性は存する」と言う。 Fichte, Werke, hrsg. von I. H. Fichte, Bd. I. S. 435
- (3) Kant, Werke, Bd. V. S. 131
- (4) フィヒテも「哲学者は意識の事実としてのこの知的直観を……直接的に、自らの意識の弧立した事実として見出すのでは ない」と主張する。即ち、知的直観は、「感性的直観との結合においてのみ可能」なのである。Fichte, Werke, Bd. I. S.
- (15) Kant, Werke, Bd. IV. S.87 Anm. 実践的領域においても同様の表現が用いられる。実践的自由が「経験によって証明され らの現存在を存在者それ自体として意識する」(Bd. V. S. 48) とか、「現存在の叡知的意識」(Bd. V. S. 108)といった表現 得る」 (A802=B830) とか、「理性的存在者の意志は……実践的なものにおいても……物の叡知的秩序において規定可能な自

が用いられている。

- (年) H. Heimsoeth, Persönlichkeitsbewußtsein und Ding an sich in der Kantischen Philosophie, Kantstudien, Ergänzungshefte 71, 1956, S. 249 u. 254
- (口) Kant, Vorlesüng über die Metaphysik, hrsg. von K. H. L. Pölitz, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1975 (zuerst 1821),
- (18)フィヒテも知的直観に関して、「各人が直接的に自らの内に見出さねばならない」(傍点筆者)と言う。 Fichte, Werke, Bd. I. S. 463
- (2) Kant, Werke, Bd. II. S. 410
- (2) Kant, Werke, Bd. II. S. 228
- ম) auch B132, A401
- (2) auch A139=B178, BXXVII, A35=B51, B113, B114, A108 usw.
- (23) カントは仮象(Schein)という語を、i)現象の対概念として、ii)真理の対概念として用いる。ここではi)の意。Vgl. H. Vaihinger, Kommentar, Bd. II. S. 488
- (전) H. Heimsoeth, ibid. S. 240
- (원) Kant, Werke, Bd. IV. S. 68
- (26) カントは、この章を「付録(Anhang)」としている。だが、この章は、その直前の章「あらゆる対象一般を現象体と叡知体 界の自覚を通じて具体的統覚が哲学的理性と合一することを主張せんとするところに、その意義を有するのである。 とに区別する根拠について」と同様、単なるまとめや付録にすぎぬものではないと筆者は考える。それらは、現象界の限
- (27)「自己自身を思惟する存在者の位置に措く」(A353)、「あらゆる意識の定式と共に、我々自身をあらゆる他の知的存在者の 位置に措く」 (A354)、「自我という内容において全く空虚な表現を、私はあらゆる思惟する主観に適用(anwenden) し得る」 (A355) といった同様の表現をも参照。
- (⅔) H. Vaihinger, Kommentar, Bd. II. S. 188
- (2) Kant, Werke, Bd. II. S. 422
- (名) H. Heimsoeth, Transzendentale Dialektik, Walter de Gruyter, Berlin, 1966, 1. Teil, S. 111

付記 本稿は一九八一年十月二四日、島根大学で行なわれた「関西哲学会第三四回大会」において『カントにおける物と自我』 の表題で口頭発表したものを基に、改題し加筆したものである。

(博士課程学生)